

# 慶陵の壁畫 中

## 目次

- 一 はしがき
- 二 慶陵について
- 三 三陵の位置と比定
- 四 陵墓の構造
- 五 東陵の壁畫
- Ⅰ 四季山水圖（以上前號）
- Ⅱ 人物肖像畫（本號）
  - （一）美道部の人物畫
  - （二）前室部の人物畫
  - （三）前東・西副室の人物畫
  - （四）中室部の人物畫
  - （五）中室東・西副室の壁面
  - （六）壙道部の人物畫
- Ⅲ 建築裝飾文様（以下次號）

慶陵の壁畫

田村實造

## Ⅱ 人物肖像畫

人物畫は、陵墓内の後室および中室をのぞく壁面、すなわち美道と前室の東・西壁面、各通廊の兩壁面、前・中各副室の周壁面および美門外方につづく壙道の東・西壁面に描かれ、各壁面とも床面上二・三寸のところから約五尺六・七寸ないし六尺くらいの高さまでを占めている。以下説明の便宜上、壙道部の人物畫はあとまわしにして、美道部のものから順にのべてみることにする。

## （一）美道部の人物畫

美門入口から隔扉の戸口枠までの約二尺五寸の間に、東壁は現在壁面の漆喰が、ほとんど剝落しているため、しさいにみても、ただ右眼とその上のまゆとあごひげの一部などが、かすかにみとめられるにすぎない。しかし、かつて昭和五・六年頃には、挿圖第一にみるように、圓領窄袖のキタイ服に無簷帽<sup>註一</sup>、いわゆる胡帽をかぶり、先端に蒜頭様の圓球をつけた三・四尺の棒（おそらく鐵骨朶または沙袋？）を、兩手に握つて立つ人物畫をみることができた。

これは人物畫といつても、あきらかに實在の人物を寫した入念の肖像畫であつて、本陵内の壁面に描かれたものは、塋道部の東・西壁面のものをのぞいては、いずれもだいたいこれと同一手法による寫實派畫風ともいふべきものである。

なお、これと相對する西壁面にも、隔扉の戸口枠までの間に、同じくキタイ服をまとい、兩手に蒜頭棒をにぎつて立つ無帽こん(髡)髮<sup>註二</sup>の人物が描かれていたが、いまはまったく剝落して、寸影もとどめていない。昭和五年の撮影にかかる鳥居龍藏博士の寫眞(遼之文化、圖譜第三冊第一八一圖版)には、その上半身部がほとんど完全にう



挿圖第一 羨門東壁面の人物

つされているが、それによると、さきにみた東壁の人物がかなり老成しているのに比べて、このものは壯年をやゝすぎたばかりの、體軀すぐれて眼光も鋭く、口元のあたりは明確にはみとめがたいにしても、悠揚として迫らざる態の重厚な性格のもち主であることは、あますところなく描寫されており、その迫力のある立體的深さを示す筆致の非凡さは、この陵墓内の各壁面における數多くの人物肖像畫のうちでも、屈指のものといひうるであらう。なお、現在露出している塋壁から推算すると、東壁面の人物は、他のものよりも一段と高く、床面より約七尺四・五寸以下に描かれていたことがわかる。

つぎに隔扉の戸口枠から、それにつづく前室の東西兩通廊開口部壁面までの間、すなわち羨道と前室の南半部とにわたる約五尺九寸の東西兩壁面に、いずれも幞頭をつけ、漢服をまとう群像が描かれていたことがうかがわれるが、鳥居博士の寫眞(前掲圖譜第一八三圖版第一八四圖版)によると、東壁面に六人の立像がみえ、向つて左端と、そのつぎの人物との上方には、キタイ文字も墨書されている。

西壁面のものは、現在やつと四人みとめられるにすぎないが——それも戸口枠に近い二人は、ただ幞頭と顔面部とがみえるのみで、眉以下は土砂に埋つている——、東壁面のものとあわせ考えれば、ここにも六人ないし七人の幞頭に漢服をつけた人物が描かれていることが推測される。西壁面の人物のうち、向つて右より三人目から二人目のものの胸さきにかけては琵琶様の樂器の上半部がみられる

が、これは四人目の人物が抱いているものらしく、また向つて右端の第一人物も、よくみると、左手にやはりなにか樂器らしいものをもつて、その先端を口にあてている。これは推測すると、この兩壁面のものは、いずれも樂人にして、東壁面の人物は樂器をたずさえ

ていない點よりすれ

ば、あるいは唱い手

であるのかも知れな

い。遼史卷五四樂志

によれば、がんらい

遼國には、國樂・諸

國の樂および漢樂の

三種があり、なかで

も太宗の大同元年五

代晋を滅ぼして採り

入れた漢樂は、聖宗

以後になると、公私

を問わず、さかんに

行われたようである

が、いまここにみる

樂人が、いずれも幘頭をつけ漢服をまとうところからみれば、その

奏樂はおそらく漢樂であろう。なお、東壁面と同じく西壁面の第一

(向つて右端)・第二・第三の人物にも、それぞれ肩の上方にキタイ

文字が墨書されている。

(二) 前室部の人物畫

挿圖第二・第三は、前室北半部の東西兩壁と前室より中室への通廊東西兩壁および東西副室への通廊北壁の全景であるが、これをみ

てもわかるように、前室

北半部の東壁には、通廊

開口部以北の約二尺八寸

の壁面に二人物、つづく

北通廊の東壁面にも、約

四尺六寸の間に二人物、

また西壁面にも西通廊開

口部以北に二人物、同じ

く北通廊西壁面の隔扉ま

でに二人物と都合四人

が、東西の兩壁に相稱的

に立ちならんでいる。た

だし現状は、いずれも腰

部以下を土砂に埋没し

て、ただ七分身をあらわ



挿圖第二 前室東北隅

すにすぎない。

そのうち東壁面のものは、床面より約六尺二寸ないし六尺三・四寸以下の高さに描かれ、兩人とも黒い無簷帽に圓領・窄袖のキタイ

服を著け、その上から數個の黃金色の金具を附する朱の革帶を佩用して、右手はいずれも軽く胸前におく姿勢をとる。なお、こゝで注意にのぼることは、向つて左方の人物の描き方であるが——相對する西壁面の人物も同じようである——その全身の五分の一ほどが、前室よりはみ出し、それが前室と北通廊との幅員の差違によつて生じた、かぎの手形の垂直壁體にまで互つてゐることであつて、これによると、これらの人物畫は、殿内に侍立する群臣たちを、そのまゝのすがたに描寫した、ほぼ等身の肖像畫であることが知られる。

つぎに、これにならぶ北通廊東壁面の二人物も、同じくキタイ服を著けているが、そのうち向つて右方のものは（圖版第二、無帽コン髮にして、うすい褐色の服に金具を有する茶褐の革帶を締め、上袍の左えりはしからは、朱の中衣の直領と、さらにその下には白い——現在は灰色にみえるが——下着のえりをわずかにのぞかせ、窄袖の兩袖口からも中衣の朱い袖はしがみえる。また左腰わきから前方にかけては、弓を納めた革製の黒い弓袋をつるし、その一端を革紐様のもので帶に結びつけており、兩手は胸のあたりで右を上、左を下に蒜頭をつけた棒をしつかとにぎり、その長い柄は、さらに帶下にさしこまれたまゝ膝の下まで達している。また左肩には、キタイ文字もみえるが、これはもつとも完全に残つていて、筆勢も一番しつかりしているようである。

この人物は、現在東陵内における肖像畫のうちでも、比較的よく

残るもので、腰部以下は他と同じく、かたく凍りついた土砂に埋れてゐることをえないが、ほかの人物よりも一段と濃い茶褐の顔色に、炯々たる眼光は、さながら生けるよう、そのひきしまつた口許、分厚い唇、秀いでた頬骨、兩びんより肩さきにかけて垂下した黒いかたい頭髮、厚みのある堂々たる體軀など、武人としての猛々しい威容は、あたりを壓している。また衣文や帶などの線にも、のびのびした、しかも迫力ある筆致をみせており、ここに描かれた人物畫のうちでも、一きわすぐれた出來ばえを示すものといえよう。このもの、および圖版第六にかかげた寫眞によつてわれわれは、この人物畫の運筆および下繪のとり方、また圖版第二からはキタイ人の髡髮（コンバッ）のありさままでも、如實にうかがいうるであらう。

ついで前室の西壁面に眼をうつすと、ここには漢人と思われる二人の漢服を著用する臣僚が立ち、うち、向つて左方の人物は平直脚の幘頭をつけ、濃褐色の圓領・窄袖の袍の上には、赤色の二重帶を佩び、兩手は胸の前あたりで左手を上にかさね合はせてゐる。袍の下には、白いじゆばんに朱い中單をかさね着してゐるらしく、左首すじの圓領のはしから、これらの直領がみえる。その幘頭は黒色にして、高さ五寸五分、後頭部のあたりから左右に水平にのびる平直脚の長さは、左端から右端まで約一尺九寸をはかる。

これにとりする右方の人物は、前者がただ鼻下に短かいひげをたくわえ、豐頬の柔和圓滿な相好をあらわしているのに對し、不敵



な面貌には、ほおからあご一面にかけて長いひげをたれており、體軀また魁偉にして、射るような眼光は、その堂々たる威儀風貌とともに、室内を壓するものがある。前述の北通廊東壁面に弓を持つて立つ國服のキタイ人とともに好一對をなすが、いづれも凡手のよくあらわしうるところではない(圖版第一)。

このものも、その兩手首を胸前に重ね合せ、また衣服も同じく濃い茶褐色の圓領窄袖袍の上に、赤色の二重帶をしめているのが目立つが、頭上の幘頭には脚がみえない。顔面は兩人とも茶褐色にぬられているが、左方の人物は色が古びて、とくにこげ茶色になつており、またいずれもその左肩にはキタイ文字がみえる。

なお、この兩人物が幘頭をつけ二重帶をしめているところから推すと、そのまとう衣服は、とうぜん漢服であろうが、しかし衣服を

のもの、別して袍についていえば、圓領窄袖にして、服の色までもキタイ服となら異なるところがない。

がんらい、遼國における漢服の制をみると、遼史卷五六、儀衛志二には、祭服・朝服・公服・常服の四種があるといい、そのうち常



第三圖挿 前室西北隅

服は、だいたい唐代の制によつて、元旦・冬至の朝禮および大祭祀をのぞくほか、みなこれを用い、皇帝は柘黃の袍・衫・折上頭巾・九環帶・六合鞞をつける。また皇太子は進徳冠をいただき、緯紗單衣・白じゅばん・白たび・烏皮履を著用し、臣下は五品以上のものと、六品以下のものと、八・九品のものとの三階級に分れ、五品以上は幘頭(折上巾)・紫袍・牙

笏・金玉帶を、六品以下は幘頭・緋衣・木笏・銀帶・魚袋鞞を、八品九品のものは幘頭・綠袍・鍮石帶・鞞をつけるという。

以上によつてみると、ここにみる兩人物の漢服、すなわち茶褐の

窄袖袍に赤色の帯という服制は、どの品官の常服——もちろん常服以外の祭服・朝服・公服ではなからう——にも相當しないが、幘頭・窄袖袍・帯をつけているところからすれば、笏こそなければそれも常服を着用しているものとみてよいのではあるまいか。

北通廊の西壁面にも二人の人物がみえる。兩者とも無簷帽をかぶり、黄土の下地に褐色をぬつたキタイ服の上には、幅約一寸内外の飾りのない肉色の革帶をしめ、いずれも左右の両手をもつて同じ格好に蒜頭棒をにぎっている（圖版第三）。それは一見して無雜作なほどに輕快に描かれているにもかかわらず、その手首やこぶしのにぎりには、力強い筆致がみられるが、しかし、惜しむらくは立體感にとぼしい。そのうち向つて左方の人物は、顔面のところどころが剝損し、眼も右の一方をとどめるのみであるが、その眼はややつり上りぎみに、顴骨高く、面長の面貌からは冷厳な感じをうける。その左わき腰におびる矢袋（箭筒）の上蓋は、はすされて前下方にだらりとたれ折れてをり、中からは、はさみこまれた幾本かの矢簇にまじつて、二本のかぶり矢らしいものもかがわれる。矢袋の下半部は埋没しているため、全體の構造は不明ながら、上半部のみのスケッチは第四圖である。べつに革帶の左わき腰からは、下方に革紐様のものが垂下しているが、おそらくこの革ひもによつて矢袋の下端部を、つるしていたものであらう。

向つて右方の人物は、身長はやや低い、肩幅廣く、がつちりした體をもち、一文字に結んだ口の上邊とあごとには、ひげもみえる

が、その濃い眉の下に描かれた眼には、溫厚な性格が充分に寫されている。その両手にもつ棒は、前者にくらべ、ほとんどまつすぐに立て、あたかも捧持するかのようであり、この點からも、この人物のまじめさがうかがわれよう。キタイ文字は、前者は左肩の上に、後者は右肩上方にかかっている。

前室より東副室に通じる前東通廊には、開口部より約三尺六寸のところに隔扉が設けられていたものらしく、その南北兩壁には、いまなお戸口枠の一部が、壁面より六・七寸あまりも突き出ているが、人物畫は、この戸口枠と前室への開口部との間の南北壁面に描かれていて、南壁面にはこん髪無帽に國服を著けた二人物がみえる。

しかし、壁面の剝落がはなはだしいため、現在では向つて右方のものは、わずかに著衣が褐色である以外には、ほとんど判別しえないが、鳥居博士の寫眞によれば、<sup>註四</sup>無帽こん髪の人物が一段高く描かれ、かつこの人だけは、ほかの全人物が一樣に後室と思われる方に眼を注いでいるのに反し、その顔を斜め東北方にそむけている。左方のものは、顔の大部分と右上半身をとどめ、その左肩には漁具でもあるらしい長太い圓筒形の竹籠様のものを擔つて、左手でその下端を支え、右手はやや上方におき、双方ともひじ以下を露出している。頭は同じように無帽こん髪にして、眼は太く、特徴のある鼻が口とともに大柄に描かれているところは、一見して頑健な體軀のもち主であることがわかる。鳥居博士の寫眞では腰部以下もみえ

るが、それによると、著衣を腰のあたりまで高くまき上げ、太股深く長靴のようなものをはいていて、あたかも、なにか水中の仕事にでも、したがっているかに思われる。陵墓内部をかざる壁畫に、このような器具をたずさえ、またこのような無作法な姿態をしているものが描かれていることは、まったく奇異の感なきをえないが、かつてわたくしが推定したように、もしかりに、本壁畫を遼朝の皇帝を中心とす

るかれらの  
捺鉢生活

——四季お

りおりにし  
たがつて遊

幸移動する

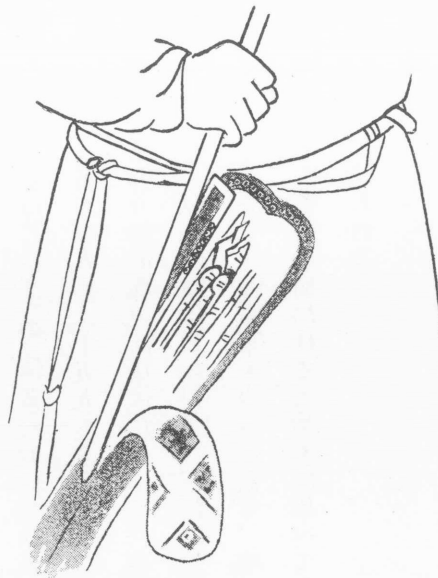
行在所生活

——を描寫

したもの

註五

考えるときは、これこそ皇帝の釣魚の遊幸に扈從する一漁臣をあらわすものであらう。



挿圖第四 箭 筒

北壁面は、南壁よりも一そう剝落の度が烈しく、ただ前述の竹籠様の漁具を擔う人物と正面して、胡帽をつけ、右手に太くやや扁平な棒状のものを握り、それを左肩さきから右脇へかけ斜にして立つ人物の上半身部が、かすかながらみとめられる。この棒状のもの

は、さきの對面（南壁）の人物の擔う漁具などから推してみると、あるいは舟の櫂の類ではあるまいか。なお、ここには戸口枠までの間に、このほかさらに二人の人物が描かれていたらしく、上衣の縁青がわずかにそのことを示している。

東通廊に對する西通廊の南・北兩壁にも、東通廊と同じくその開口部より戸口枠までの間——ここまでは、やはり前室の領域に入るのであらうが——に、國服をまとう二人ないし三人の立像が描かれている。まづ南壁をみると、三人の人物が、それぞれ肩さきをかさなり合わせて、東端のものから順上りの姿勢に位置している。つぎに北壁面のは、緑色の袍を着た二人物である。

### （三）前東・西副室の人物畫

前室から東通廊をすぎて東副室に入ると、その圓筒形周壁面には、なげし様の凸帯以下に、いずれも國服（キタイ服）に、あるいは胡帽をかぶり、あるいは無帽にこん髪をたれるなど、とりどりのよそおいをなす十人の人物が、約一尺ないし二尺の間隔をたちつつ立ちならぶが、この室は西副室とともに、外方からの土砂の流入が比較的すくないため、各人物とも膝以上、だいたい八分身をあらわしている。いま、これらの一人一人について、くわしく説明することは省くが、ひとしく立像であつても、手は胸の前で組み合すものがあるかと思えば、一方の肘のみまげていたり、あるいは蒜頭棒を握りしめていたりなど、めいめいのポーズをとり、顔の表情も、とりどりである。服装も、みな上袍は著ているが、その色は緑があ

つたり、褐色があつたり、またその上に締める革帶も自由な結び方をしている。このような點から考え合わせても、この人物畫が寫實の肖像畫であることは充分にうかがいえるよう。(圖版第四)

つぎに西通廊から前西副室に入ると、ここでも東副室と同じくやはり、その圓筒形周壁面に約十人ばかりの等身の立像が描かれていたと思われるが、現在では、わづかに五人のみがみとめられるにすぎない。この五人物も、みな綠色または褐色の國服をまとい、胡帽のもの、無帽被髪のもの、手も思い思いの位置にしている。以上、兩副室の周壁面にみえる多くの人物(十五人)をみると、兩副室とも水氣の浸蝕をうけて漆喰の剝落度がはなはだしくて、各人物の顔部はもとより、衣文や手・腕の描線なども判明しがたい部分が多いため、確言はしえないが、概して前室東・西の壁面や、中室への通廊、すなわち北通廊東・西壁面に描かれる人物畫に比べてみても、大した遜色はないように思われる。

#### (四) 中室部の人物畫

中室の四分された周壁面には、春・夏・秋・冬の四季山水圖が描きわけられていることは、すでに前節においてのべたところであるが、中室よりその東・西副室へ通じる各通廊には、前室の東・西通廊と同様に、開口部と隔扉の戸口枠との間の南・北兩壁面に、それぞれ二人ないし數人の群像がみえる。

まず、その東通廊の南壁面をみると、ここには二人物がいることが顔面部や下半身部によつてわかる。鳥居博士の寫真によれば、か

なり明瞭である。またここでは、床面に土砂の堆積がすくないため、さきに前室や、その東西通廊あるいは東西の副室などにおいてはみえることをえなかつた、下肢の部分までもかすかながらうかがわれる。それによると、袍のすそは膝下あたりまで達し、おのおの兩脚には、朱い長靴(右方の人物)と黒い長靴(左方の人物)をはいていることがわかる。すそのあたりや、長靴のかたちなどについては、壙道部の人物畫を参照すると、かなりはつきりするであろう。

南壁面の二人物に對して、北壁面にも、ちやうど同じ壁間に二人の立像がみえるが、これは珍らしくも女子であり、現在みうるかぎりでは、東陵内の人物肖像畫のうち、婦人の畫像は、この兩人のみである(圖版第六)。いずれも、やや右斜の向きに描かれており、そのうち向つて左方のものの髻は、わが正倉院御物の屏風にみえる鳥毛立美人や、あるいはスタイン氏將來の西域アスターナ發見の唐美人圖などにみる唐代女子のそれによく似るが、<sup>註七</sup>しさいにみると、それはかづら風の黒い髪覆い(?)を、生えざわや耳の上部までかくれるほどに、まぶかにかぶつてゐるらしく、これはあるいは金史卷四三興服志に、年老者以皂紗籠髻如巾狀、散綴玉釧於上、謂之玉逍遙とみえるものにあたるのではあるまいか。<sup>註八</sup>そういえば、この婦人の相貌は、かなり年配のように思われる。面部は現在色あせて灰黃色に近いが、もとは黃色がかつていたらしく、これは張舜民の使北記に、北婦(遼國の婦人をさす)は黃物をもつて面にぬる、これを佛粧という(契丹國志卷二五所收)とか、あるいは萍洲可談卷二



に、先公いう、北に使したるに、北使耶律家の車馬が來りむかえるをみる、氈車中に婦人あり、面に深黄をぬり、眉を紅に、吻を黒くす、これを佛粧という、とかみえるところの、當時におけるキタイ婦人の化粧法の一つである黄粉を、面にぬつたさまをあらわすものようである。<sup>註九</sup>

その衣服は、上に窄袖の緑衣をまとい、下には朱の中衣と、白の下着をかさねるが、それらのえりは男子の圓領とは異り、直領を右まえに合わせ、また下着の白えりは、背後の首すじのあたりで、外方に折りかえされて中衣の朱えりを包むような恰好をしている。女子の窄袖は男子のものとは異つて、がんらい短かいものらしく、袖口は兩肘のあたりで、ピタリと腕にくつついており、肘からあらわに出した手は、双方とも胸さきで、左方は五指をやわらかく折り、おやゆびと人さしゆびとでは圓をつくり、また右手は、各指をしせんのにのばしたままにしているが、そこにみる弾力性の筆線からは、女性らしいしなやかさが充分にくみとれる。帯は廣巾の白羽二重よりのものを、無雜作に束ねて胸さきの、鳩尾（みずおち）あたりで眞結びにし、その兩端を等分にたれているが、路振の乗軺錄に、聖宗の生母承天太后に侍る侍女たちの服飾について、侍立者十餘人、皆胡婢、黄金爲耳瑱、五色綵纒髮盤以爲髻、純練綵衣束以繡帶と記している繡帶は、これをいうものか。なお、左肩から前方にかけては、上衣の上から狭い巾の肩かけようの白絹を長くたれるが、これも唐代の婦女が好んで着けた、帔子または帔帛とよばれる

ものの類であらう。この婦人の右肩上方には、キタイ文字もみえる。

向つて右方の婦人は、前者の左斜背後に立ち、現在は大半剝落して、わずかに下顎部をのぞく面部と下半身の一部をとどめるにすぎない。これも直領の綠色上衣をまとうが、その直領は、前者とは異り左まえであり、この點前引の金史輿服志に、婦人の服は直領左衽（左まえ）にして……中略……これみな遼の服である、とみえるものによつて一致する。上衣の上には、左肩から白い輕羅ようの帔子を長くたれ、さらにこれを左腕に大きく一まわりたぐりあげ、なお別に、上衣ようのものを肘のあたりにかけており、右手はそこにかるく置く姿勢をとる。おもうに、これは前者の侍女であろう。鳥居博士の寫真によれば、この婦人も前者とはやや異なるが、頭髮の上から黒い紗帽に似たものを、眼深かにかぶつてゐるかにみえ、やや伏し目がちにした眼ざしには、やさしいうるおいが感じられる。なお兩人とも、床面上約五尺五・六寸以下に位置し、現在下半身部が剝落しているため、衣服のすそや、はきものなどについては、詳かにしえないが、この部分も鳥居博士の寫真によると、上衣は男子のそれよりも長く、ほとんど足首にまで達するばかりであり、袴はみえない。また脚には、男子と同じく長靴をはいているようである。

中室と西副室をつらねる西通廊にも、その開口部と隔扉の戸口枠との間——約四尺——に、南北兩壁面とも人物の立像が描かれて

いるが、南壁面の破損はかなりひどく、現在では三人の人物が、かろうじて跡をとどめるにすぎない。しかし鳥居博士の寫眞によれば、いづれも頭上に胡帽をいただく四人の立像が、巧みな配置をもつて群像風に描かれている。<sup>註一〇</sup>

南壁に對する北の壁面には、二人物の立像がみえる。向つて右方のものは、黒い胡帽に綠色の袍をつけ、下には朱の中衣と白の下着をかさねているが、この人物の上半身は、ほとんど完全に近いまでによく残り、その面貌に示される鐵線描ともいふべき雄勁な筆致はもちろんのこと、力強く引かれた下圖の刻線までも、充分にうかがわれる(圖版第五・六)。その眼は、ややつりぎみに描かれているにもかかわらず、品のよい溫顔には、言いしれぬ親愛の感がわき、われわれ日本人に接するような錯覺にすら陥らしめる。兩手はやはり、肘から折り曲げ、胸さきに淺く輕くかさね合わせており、帶は朱の革帶を袍の上からしめて、前正面にたれるが、そこには別に金具をもつ二本の緒様のものもたれている。

つぎに、この人物の右斜め背後に、その左三分の一身ばかりをかすようにして、やや高く立つ第二の人物は、同じく黒い胡帽をかぶり、それを後頭部でかく結んでいるらしく、あまつた兩端の一方が、首すじのうしろにまで長くたれている。面部は灰色であるが、天井から流れおちる漆喰にかくされて、右眼と鼻・口・下顎部をあらわすにすぎないが、威嚴のある眼、高い鼻、かく結んだ口、ひげなどには非凡な筆致がうかがわれ、とくにその眼には、眞

にせまるものがある。衣服は淡褐色の袍の下に、朱の中衣をかさね、上には黒い帶を眞結びにしめ、また、その右腰わきから前にかけては、珍らしくも、いわゆるスキタイ刀子をつるしているのが注意にのぼる。このスキタイ刀子は、やや内に彎曲し、長さは垂直に計つて約七寸五分ある。この人物も、手は兩肘から折り曲げて、胸さきに右手を上にして淺く握り、その人さし指のみは、まつすぐにのばしている。兩人物の畫面における高さは、前者が床面より約五尺六寸以下、後者はそれよりもやや高く約六尺以下に描かれている。

#### (五) 中室東・西副室の壁面について

中室の東西につらなる兩副室は、東陵内でも、もつとも換氣のわるいためであろうか、夏期になると、天井部から流下する水滴は雨のごとく、したがつて天井部や周壁面の漆喰も、この水氣の浸蝕をうけて、他の室にくらべれば剝蝕がことのほかはなはだしく、すくなくとも周壁面においては、兩副室とも遂に壁畫の殘存することを見とめえなかつた。しかし、ただ西副室天井部、とくに西通廊によつて、天井部がアーチ形に切られる上部附近に、かすかに裝飾文様をとどめているところから推すと、これら周壁面にも、前室東・西副室と同じく、人物畫が描かれていたものとみるべきであろう。

中室と奥室をつらねる北通廊の東西兩壁にも、あきらかに肖像畫のあつたことをうかがうが、現在ほとんど原狀をとどめないまでに剝落しつくしている。ただ幸にもわれわれは、その東壁面

に、わずかに残る一断片の壁畫のうちから、顔面の右四分の一ばかりの輪廓線と口邊部とを見だしえたが、これはすこぶる貴重な発見であつた。

というのは、これまでみてきた人物畫は、その大部分が正面きつてはいるが、顔のみは一樣にやや斜めに向き、そのひとみはいづれも、中室か奥室の方を凝視するかのよう描かれている。これはいうまでもなく、この陵寢内に奉祀された帝・后の棺柩の位置を示すものであらうが、しかし陵内が一物をあますものもないまでに荒廢している今日では、かんじんの棺柩は、はたして中室か後室のいづれに安置されていたのか全く知る由もなく、われわれにとつては、ただ中室から後室へ通じる北通廊壁面に描かれる人物の、顔の方向と眼の位置とが、残されたただ一つのかぎであつたのである。そこでこの顔面断片を復原してみると、この人物は、あきらかに後室の方を向いていたことがわかる。このことは、後室内部の裝飾的構造が、他の諸室に比して異り、塼壁面には漆喰をほどこした形跡がなく、それに代るに、曲材をつみかさねて木造の内壁をつくりあげていたらしい點——奥室内部の構造については、ここでは詳しくのべることをさけるが——などと思ひあわせて、問題の棺柩は、後室に奉安されていたものと推定され、したがつて中室には、哀冊碑石や木偶やづし（厨子）および諸調度品の類が安置してあつたかと思われる。<sup>註一</sup>

以上略述したところによると、東陵内に描かれた人物には、國服

をつけたキタイ人と、漢服を着用する漢人とが互にならび、またそれらのうちには、武官もあれば文官や樂人もおり、さらに二人の婦人までもみえる。その多くは、二人ならびの像であるが、なかには美門の東・西壁面などにみるような單身像や、あるいは前室南通廊の東・西壁面、同じく西通廊南壁面、および中室西通廊南壁面にみるような群像風のものもあり、いずれもが端正な姿勢をとるほぼ等身大の像にして、かつその面貌には、類型的なものはなく、雄勁な筆致によつてそれぞれの個性が巧みに描き出されており、まさに唐代の古格を存するものといえよう。<sup>註一二</sup>しかも、その異なる個性のうちにも、一般に細くて鋭い眼光、ややつりあがるまなじり、さして高くはないが太い鼻、深い鼻翼溝、ひきしまつた厚いくちびる、高く秀でた顴骨、太く短い首筋、額やまなじりにきわ立つモンゴル皺、硬直した黒い頭髮など、モンゴル系民族に特有な容貌が如實にうかがわれる。<sup>註一三</sup>

さらにまた、この肖像畫を特色づけるものは、その顔だちの描寫にあたつて、黒い輪廓線にそうて褐色の線で、かすかな描きこみをしていくことである。この特殊な表現法は、顔面の陰影を深めるのに、くまどりに似る大きな効果をもつもののように思われる。

人物の上半身や衣服・帯などの部分になると、筆致に弾力性をおびてきて、線に肥瘦が生じ、その上に衣服の皺襞は、同じ色彩の濃淡であらわされているため——しかし、ところどころには、暈染の陰影法もかすかながら残っているが——これがかえつて筆勢に暢達

さを加え、衣文のさばきや帶の結びぐあいにも、みるもののきもちまでもひきしめずにはおかぬものがある。

なお、陵内の各人物の左右いづれかの肩の上方には、そのつどしるしておいたように、二字ないし數字のキタイ文字が墨書されているが、なかには今は剝落したり、あるいは上方から流れおちた漆喰におおわれて、すでにみるをえないものもかなりある。しかし、その書體や筆法を、おのおの異にする肉筆であるところから推すと、がんらい陵内の全人物に、それぞれ書かれていた署名とみるべきであらう。

これからみても陵内のものは、いずれも忠實な肖像畫といえるが、各人物像を通じてみると、山水圖において一言したと同じように、それらが、幾人かの、あるいは幾組かの畫匠たちの手になるものであることが想像されてくる。詳しい説明は別の機會にゆずるとして、大ざっぱにいえば、たとえば美門入口東西壁面の人物（各一人）、前室東西壁面の人物（各二人）、およびその北部通廊すなわち前室から中室への通廊東西壁面の人物（各二人）、中室西通廊北壁面の人物（二人）などは、仔細にみると、それぞれ顔面部や衣文にも多少の差違はみとめられようが、だいたい同じ組と考えられないであらうか。

また、美道東西壁面の樂人群像は別の組であり、これは前者に比べると、はなはだしく見劣りがする。前室東通廊南北壁面および東副室周壁面の各人物は、だいたい一組であり、同じく前室西通廊南

北壁面および西副室周壁面の各人物は、別の一組をなすようである。それから中室東西通廊の南北壁面の人物——ただし西通廊北壁面の人物はのぞく——は、また一組をなすかと思われる。もつとも、これは筆者の素人考えであつて、この點に關し大方の示教をうれば幸甚である。

#### （六） 墳道部の人物畫

人物畫は、いまのべた陵内の各壁面にみえるもののほかに、美門外方に長くつらなる墳道の東西兩壁面にも描かれ、いずれも同様等身の立像であるが、この壁畫は、われわれの調査によつて、はじめで發見されたものである。

もともと、われわれの目的は、これまで知られた部分を綜合的に調査實測するにあつたので、美門の外側において、大半土中に埋れて、わづかにその一部を露出するにすぎなかつた墳道を、一應實測するための手段として、東壁を約二十二尺、西壁を約十六尺にわたる床面まで掘り下げたところ、はからずも兩壁面に、あざやかな壁畫を見出したのであつた。以下この部分の壁畫について、知りえたところを、かんたんにのべてみよう。

まづ東壁面には、約二十二尺の間に、それぞれ國服をまとい、兩手に赤頭棒をもつ六人物の立像と、一頭の馬とが描かれている。それらの位置は、美門の近くに、床面より約八尺以下の高さに立つ第一の人物から、約二・三寸ないし一尺くらいずつ順上りになるかっこうである。すなわち第二の人物は、第一人物の頭部より二寸高



く、第三は第二のものより三寸高く、第四は第三より三寸五分、第五は一段と高くて第四より一尺三寸五分、第六は第四より三寸高い。

各人物とも、いずれも正面をきつてはいるが、顔だけは心もち斜

め北むきに、その

眼はひとしく陵内

にそがれる。ま

た人物の配置をみ

ると、内部のもの

と同じく、單身像

と群身像とがあ

り、第一より第三

までのものは單身

像であるが、第

四・第五・第六の

三人物は群像風に

描かれ、第五のも

のを中央に一段高

く配し、その兩脇

やや前方に第四と第六の二人物が立っている。

それらのうち、比較的によく土砂の汚損からまぬがれている第一

および第二の人物についていえば(挿圖第五参照)、前者は、壇道の東

壁が美門に直交するところから、中間に尖拱形の小龕をはさんで、約二尺三寸の間隔をおいて立ち、床面積から頭頂部までは約八尺の高さである。服飾は陵内の人物にみるものと同様、黒い胡帽に群青色の圓領窄袖の上衣をつけ、下には朱の中單と白の裙襦をかさね着

しており、上衣の上か

らは、前正面に矩形の

とめ金具をもつ朱の革

帯を締め、それを左脇

で短かく結んでいる。

また、その結び目のあ

たりからは、細長い一

見刀子のようなものを下

げ紐でつり下げている

が、それはおもうに礪

石であらう。上衣は膝

の下、脛の上部まで達

し、脚には黒の長靴を

はくが、その上端部は

上衣のすそにかくれて

みえない。兩手は胸さきのあたりで、左手を上にして蒜頭棒の上部

をにぎる。顔は淡い褐色に塗られ、全身長は約五尺八寸を計る。

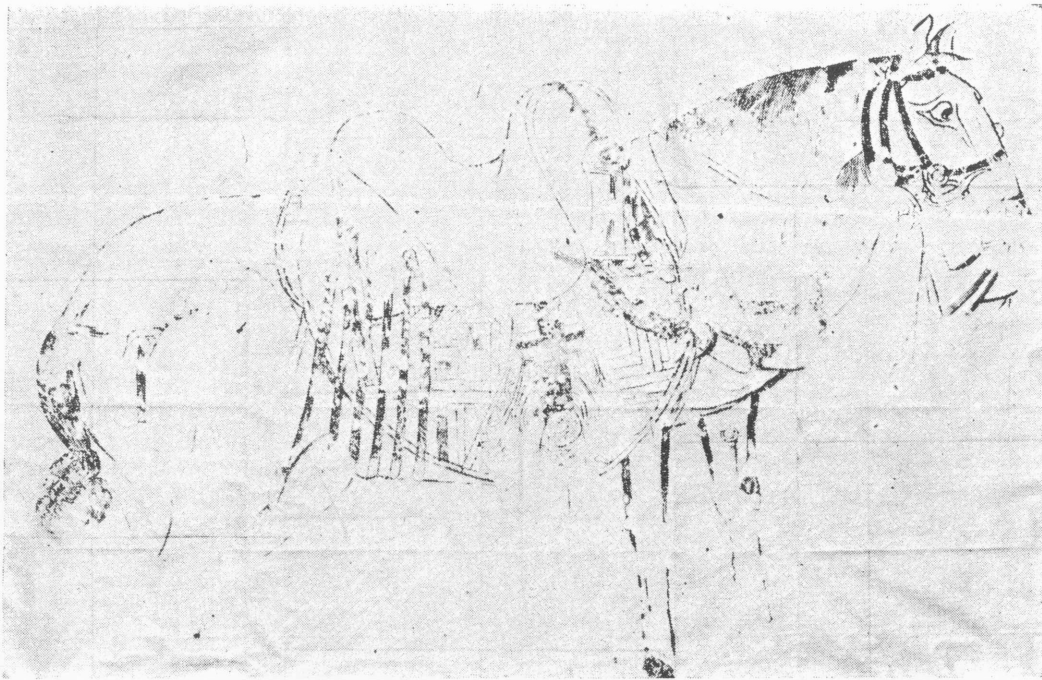
第二の人物は、同じく黒の胡帽をかぶるようにみえるが、背後の首



挿圖第五 東陵擴道部東壁の人物

筋に結びの端がたれている點よりすれば、あるいは黒い巾幘でしば

挿圖第六 墳道部東壁面の繪馬 見取圖



つている  
のかも知  
れない。<sup>註一四</sup>  
顔は淡い  
褐色に、  
やや調子  
がつけら  
れており  
また衣服  
は緑青の  
上衣に、  
朱の内衣  
と白の下  
衣をかさ  
ね、上に  
は朱の革  
帶をしめ  
る。第一  
と同様に  
脚には黒  
の長靴を

はき、手に蒜頭棒をにぎり、その身長は約五尺八寸五分である。

第三の人物以下は、土砂による壁面の汚損が甚しくて、充分にうかがいえないが、第五のものをのぞけば、いずれも兩手に蒜頭棒をもつ。その國服と帶との色合は、つぎのようにとりどりである。

(人物の番號) (上衣の色) (中衣の色) (下衣の色) (帶の色)

第三 黃色 (朱でくまどる) 綠色 白色 朱色

第四 群青 朱色 白色 朱色

第五 緑青 朱色 白色 褐色

第六 黃色 (朱でくまどる) 群青 白色 朱色

つぎに繪馬は、第六番目の人物につづいて美門を背後にして横に長く描かれ、鼻さきから尾部まで約七尺八寸の幅をもつ。その毛なみは茶褐色にして、たてがみは垂れたままとし、尾は中ほどから大きく束ねられる。背には群青色の革鞍をおき、またあぶみや美麗な馬具<sup>註一五</sup>で盛装されているが、おそらく、本陵の主人公たる聖宗皇帝の常乗の愛馬でもあらうか(挿圖第六)。このほか、馬の前方には、さらに手綱をもつ黄衣朱帶の人物の下半身部が、掘り残した土石の間からうかがわれるが、これより推測すると、この東壁面には、なお、つづいて幾人かの人物が描かれているのかも知れない。

西方の壁面には、約十七尺の間に、同じく國服に蒜頭棒をもち胡帽をかぶるもの、あるいは無帽こん髪の八人物の立像がみとめられ、さらに、これらにつづいて約三尺あまりの間に、二人物の頭部がみえる點から推すと、ここにも東壁面と同じく、まだ多くの人物

が描かれているものと思われる。各人物の配置は、東壁面と同じく、美門に近く立つ第一の人物から、三寸ないし九寸づつ順上りになつており、<sup>註一六</sup>また第一より第四までは單身像であるが、第五・六・七・八の四人物は、群像をなすようにみえる。

もともと、壙道部は露天にして、床面から兩壁頂にいたる空間は、割石を混じる砂土をもつて充填されているため、壁畫はいずれも土砂の密着することによつて、いちじるしく汚損されており、とくに西方壁面は、東方壁面に比してそれが一そうはなはだしく、人物の一人一人を識別することすら困難を感じさせる。ところが、ただ美門にもつとも近く立つ第一の人物像のみは、さきに第四章陵墓の構造の條において一言したように、入口を封鎖するため、美門の前方に高くつみ上げられた塼によつて、かろうじて土砂の密着による汚損からは免れ、かなり鮮明にのこつていた。これによつてみると、顔面部や頭髮・兩手首などは、陵内のもと同じく強勁な線をもつて描かれ、ややつり上りぎみのまなじりや、兩びんから肩さきに長くたれ下る黒髪の硬直さなどは、鼻下のひげとともに、一見鐵線にも似かよう描法を思わしめる。しかし、その兩眼から鼻すじ、兩耳のあたりにかけてほどこされた淡い朱量は、筆線からうける硬い感じをいくぶんかやわらげると同時に、この人物の表情にも、若々しい生氣にみちた潑刺さをあたえている。その衣服は、同じく圓領にして窄袖の綠色長袍をつけ、下には朱の中單と白のじゆばんをかさねていることが、圓領のはしにみえる直領からうかがわれる。

そして、この人物にみるところから推すと、じゆばんの白えりは、背後の首すじのあたりで、外側に高く折りかえされていることがわかる。上衣の上には肉色の革帶を締めるが、いまのバンドにみるように、體の前正面にあたる部分には、矩形の<sup>横一寸六分</sup>とめ金具<sup>縦一寸三分</sup>がそえられ、それによつて、しめたりゆるめたりを調節していたようである。また胸の前には、蒜頭棒を正しく垂直に立て、左手は胸のあたりで棒の頭部をかるくおさえ、右手で棒の上端を握りささえている。衣服の部分の描法は、肥瘦をもつ太い筆線をもつて、のびのびと描かれるが、胸さきにかさねた兩手の繊細な線が、かえつてそれらの奔放ともみるべき筆勢を、ぐつとひきしめているかにみえる。<sup>註一七</sup>つぎに、この西方壁面にみえる八人物の衣服と上帶の色とを表示してみよう。

(人物の番號)		(上衣の色)	(中衣の色)	(下衣の色)	(帶の色)
第一	綠青	朱色	白色	朱色	
第二	群青	朱色	白色	朱色	
第三	黃色	未詳	未詳	朱色	
第四	群青 (灰色をまじう)	未詳	未詳	朱色	
第五	綠青	朱色	白色	朱色	
第六	黃色 (綠青でくまどる)	綠青	白色	朱色	
第七	黃色	未詳	未詳	朱色	
第八	群青	未詳	未詳	朱色	

以上、壙道の東西兩壁面に描かれた人物畫を一見すると、その頭

髪や顔面部、手首などの筆線には強勁な描法が用いられ、首部から下の衣服や帯になると、筆致にあたりがでて、やや肥瘦のある太い線を奔放に走らしているが、がいていえば、陵内のものに比べて粗笨の感なきをえない。ただ注意すべきは、それらの衣服のうちに、たとえば東方壁面の第三人物および第六人物、西方壁面の第六人物などのように、黄の地色に朱あるいは緑青をもつて、くまどられたものもみうけられることである。さらにまた、著るしい相違としては、これらが陵内部にみるような、寫實派の畫風による入念な肖像畫ではなくして、まったく類型的。方便的に描かれている點であるが、おもうにそれは、陵内のものが當時の親臣貴戚を、そのままでのすがたに忠實に模寫したのに對し、擴道部のものは、宮門外に立ちならぶ衛士か從者を示すべく、一般的に描かれたがためではあるまいか。陵内の各人物の肩上には、それぞれキタイ文字で署名されているのに對し、擴道部のものには、それがなくとも、いまの推測をうらづけるであろう。

なお、擴道部の壁面は露天である上に、さきにものべたように、割石を混じた砂土をもつて埋めつくされていたため、漆喰の中にまで土砂が深く喰い入り、兩壁面とも美門に近い第一人物をのぞく以外は、ほとんど識別しがたいまでに汚損されていることは、まことに惜しむべきしだいであり、その上、割石や、壁面に密着した被土をとりのぞくにつれて、漆喰の剝蝕は、ますます大きくなつていつたが、このことがかえつて一つのあたらしい知見をもたらすこととな

つた。すなわち、剝損した部分を注意してみると、その下には、さらにいま一重の漆喰が塗りこめられていて、そこにはまた別の著色等身の人物畫が多數描かれていることが判明した。このことは、一見奇異な感をいだかせるものであるが、おもうに、さきに描かれていた人物畫が、なんらかの事情によつて塗りつぶされたのを、ふたたび修理改塗された壁面に、このあらたな人物像が描かれたものと解すべきであろう。このなんらかの事情とは、現在にあつては、それを適確につきとめうるすべもないが、もし臆測をゆるされるならば、われわれには、つぎのような考えがうかんでくる。すなわち、さきに第二章において擬定したように、はたしてこの東陵が、聖宗およびその二后妃をまつる永慶陵であるならば、遼史ならびに哀冊碑文によると、永慶陵は太平十年(1020)冬十一月二十一日、聖宗の寢柩を遷座して以後も、なお二十八年後の清寧四年(1058)五月四日欽愛皇后の柩葬と、さらに五十一年後の大康七年(1081)仁德皇后の柩葬とに際して、すくなくとも兩度は開かれていることが知られるが、おそらくこの二回のうち、いずれのときにか修理がほどこされ、壁面の改塗も行われた結果、そこにあたらしい人物畫が、古いものの上に描かれるにいたつたものではあるまいか。

最後に、人物畫の賦彩について一言しておくと、本壁畫の顔料としては、天井部の建築裝飾文様といわず、あるいは人物・山水といわず、一様にいわゆる岩繪具が用いられ(壁畫全般にわたる顔料の化學的研究については、前號にみるように名古屋大學山崎一雄博士



の詳細な報告があるが)人物の顔面部は、陵内・壙道部を通じ、多く灰黄色か淡褐色、俗に肉色——まれに濃い茶褐色——にして、帽子は墨、衣服は上衣には緑青・たいしや・淡褐・群青・黄などの諸色が配せられるが、中衣は朱が多く、下衣は白の一色である。また帯には、朱・たいしや・墨などがほどこされ、それらの配色の技巧にも、すこぶるみるべきものがある。そのうち緑青には、墨の下地がかけられているが、緑衣をまとうものは、いづれもところどころ剝落して墨地がしみだしているため、いまはみた眼には一體に蒼黒い感じをうける。

註一 キタイ服と無簪帽 キタイ服とは、遼代主として契丹族出身の官僚が着用した衣服をさしたもので、遼史などには國服あるいは、胡服とも稱している。これについては、拙稿、契丹族の服飾について(その二)、(考古學雜誌第三四卷七號所收)を、また無簪帽は俗に胡帽ともいわれるが、これについても、いまいつた拙稿の、その一にあたる論文(考古學雜誌第三三卷第一二號)中の胡帽の條を参照されたい。

註二 コン(髻)髪 契丹人のコン髪についても、拙稿、同前論文(考古學雜誌第三三卷第一二號)中の髻髪についての條を参照されたい。

註三 現在、遼代のものと考えられている遼陽石砬子屯の壁畫古墳にも、左右の兩壁面に、それぞれ五人の樂手が樂を奏する圖が描かれている。かつてこの壁畫の發掘に従事した山本守氏は、つぎのように報告されている。

畫題は、正面に帳幕かと思はれる四面の風景畫を描き、その右には祭器か樂器を持つ男女おのの一人の立姿あり、その次に五人の樂手が樂を奏する圖を描く。左側も同様である。(東洋史研究第二卷五號)。

註四 鳥居龍藏、遼之文化、圖譜第三冊第一八七圖版参照。

註五 田村實造、遼陵壁畫を通じてみたる契丹人生活の一面(史林第二七卷一號)。

註六 この婦人の像についても、鳥居博士の寫眞(遼之文化 圖譜第三冊第一九一圖

慶陵の壁畫

版)を参照されれば、さらによく判るであらう。

註七 唐代婦人の髻については、原田淑人博士の唐代女子化粧考(史學雜誌第二一編第四號、あるいは東亞古文化研究所收)および何斯瑾、唐代女子之服飾考(史觀一二)などを参照されたい。

註八 なお焚椒錄に懿德皇后(宣懿皇后)の服飾について

皇后もまた紫金百鳳衫・杏黃金縷裙を着け、上に百寶花髻をいただき、下に紅風花鞞をうがつ

というが、百寶花などというような色の飾りをつけた髻もあつたものと思われる。

註九 黃粉を面にぬる風習は、おそらく中國婦人の化粧法の影響であらうが、志田不動庵氏(支那における化粧の源流、史學雜誌第四〇編七號)のいわれるように、これをとくに額の生えぎわにぬつて着色したものか、どうかは不明である。しかし、すくなくとも、この壁畫にみるかぎりでは、額全面を黃色にそめていたように思われる。

註一〇 鳥居博士、遼之文化、圖譜第三冊第一九二圖版参照。

註一一 鳥居博士前掲圖譜によれば、東陵の中室内において、契丹服および漢服著用の多數の木偶あるいは厨子調度の木片をえていられる(第二一六圖版、第二一九圖版、第二二〇圖版、第二二三圖版、第二二六圖版)。

註一二 その畫風は、わが弘法大師將來の李眞筆、眞言五祖像(京都東寺藏)、とくに現在もつともよく原影をとどめる不空金剛像とか、あるいは鳥居博士もいわれるように、高野山普門院の勤操僧都影なども通じるものがあると思われるが、これについては、別の機會に論じるつもりである。

註一三 白鳥博士は、かつて東胡民族考(史學雜誌第二四編)において、遼史などに少數ながら傳えられている契丹語から推測して、契丹語を蒙古種にややツングウス種を混じらせたものと論じられたが、本壁畫にみえる人物の容貌から推すと、さらに一そう蒙古種に近似しているように思われる。

註一四 巾幘は幅巾ともいうが、これについては拙稿、契丹族の服飾について——その頭髪と胡帽(考古學雜誌第三三卷一二號所收)を参照されたい。

註一五 馬具については説明を省くが、その著装の状態や、馬尾の束ねられているありさまなど、アルタイのバズイルク古墳發見のものに似るところが多いように思われる（梅原末治博士、古代北方系文物の研究所収、アルタイ地方における考古學上の發見）。なお遼國では、みごとな裝飾をもつ馬具類がつくられたもののようである。例えば冊府元龜や五代史などによると、國初から金花鞍轡とか水精玉裝鞍轡などの品が、進獻品や貿易品として中原の諸國や江南の國國へおくられている。

註一六 たとえば、第二の人物は、第一人物より約三寸高く、第三人物は第二人物より三寸六分、第四人物は第三のものより六寸七分、第五人物は第四のものより四寸三分、第六人物は第五のものより九寸高く描かれるが、しかし第七のものは第六の人物より四寸五分低い。なお、第三人物と第四人物との間には、朱にぬられた大きい長方形の箱様のものがみえるが、それが何であるかは詳かでない。

註一七 考古學雜誌第三三卷第一二號圖版（上）参照。